

古都・京都から核兵器廃絶にむけた世界の人びとへのアピール

日本最初のノーベル賞受賞者・湯川秀樹博士は、人類と核兵器は共存しえないとして、人類の生存のためには核時代を超えるヴィジョンが必要だと説かれました。

2010年は、兵器としての原爆がヒロシマ・ナガサキに投下されて65年目になります。ヒロシマ・ナガサキの悲劇が示すように、核兵器の使用は一瞬にして無数の命を奪い、世代を超えて人びとを苦しめ、人類の生存を脅かしています。

今年5月、ニューヨークで核不拡散条約（NPT）再検討会議が開かれます。人類は、すべての国の安全保障を軍備にたよることなく達成するという大きなヴィジョンへの第一歩として、期限を切った核兵器廃絶条約に合意できるか否かという大きな岐路に立っています。

私たちは、被爆国民として、恒久平和と戦争の放棄をうたった日本国憲法を持つ国の国民として、核兵器の廃絶を強く願っています。

私たちは湯川博士の遺志を継承し、原爆投下の候補地でもあった日本の古都・京都の地から世界の各国の指導者、そして地球上のすべての人びとに向け、核不拡散条約（NPT）再検討会議において、期限を切った核兵器廃絶条約の合意が達成されることを心から訴えます。

2010年4月22日

● 呼びかけ人（50音順）

有馬 頼底（臨済宗相国寺派管長）

有地 淑羽（アボリション2000ネットワーク京都代表）

安斎 育郎（立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長）

須田 稔（憲法9条メッセージプロジェクト事務局長）

瀬戸内寂聴（作家）

高木 隆郎（医師・IPPNW京都府支部支部長）

鶴見 俊輔（哲学者）

永原 誠（京都原水爆被災者懇談会世話人代表）

長谷川千秋（元朝日新聞大阪本社編集局長）

益川 敏英（京都産業大学教授）

宮城 泰年（本山修験宗総本山聖護院門主）

望田 幸男（非核の政府を求める京都の会常任世話人代表）